様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７０５

研究課題名（和文）日本人英語学習者の論文の執筆支援のための基礎研究

研究課題名（英文）A linguistic research on English academic writing by Japanese speakers

研究代表者
奥切　恵（Okugiri, Megumi）

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：７０４１０１９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では 、第1・第2言語としての英語と日本語データ・情報を倫理審査を経た後、120人の英語母語話者と79人の日本語母語話者による英語意見文と32人の英語母語話者による日本語意見文、合計231人分の意見文データを収集することができた。加えて、その意見文データの公開を実現し、またそのデータから抽出した言語形式について研究成果を国内外の学会で発表し、論文にもまとめた。2015年度に本研究期間は満了したが、2016年度にも2つの国際大会と1つの国内大会での研究成果発表が確定されている。

研究成果の概要（英文）：The current study investigated the use of linguistic forms and rhetoric structures by Japanese speakers in English opinion essays. This study is authorised by the Ethics Committee of Tokyo Healthcare University and has accomplished collecting English and Japanese essay data of 231 native speakers and second language learners along with their consent form. The written data has been opened to the public on the Net so that any researchers in the world have can access to it. The data is called The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students (MOECS).
We have presented and published our studies using the corpus. We have also accepted presenting three of our studies at three conferences in 2016.

研究分野：言語学、言語教育学

キーワード：アカデミック英語教育　ライティング教育　第二言語習得　言語コーパス　談話分析　ディスコースマーカー　論理展開　用法基盤モデル

１．研究開始当初の背景

日本では、教育・研究における国際競争力の強化を目指し、大学、大学院等の理系のみならず文系においても、学術論文を英語で執筆するよう、求められるようになってきた。それに伴い、大学での英語教育においても、学術論文の書き方（アカデミックライティング）を指導する必要性が高まっている。これは、日本語を母語とする日本人英語学習者のみならず、教育の国際化拠点計画によって来日する留学生も対象となっている。応募者らの大学や大学院でも、こうした取り組みは少しずつ始まっており、教育体制の整備が急務となっている。しかしながら、アカデミックライティングは、スピーキングとはもちろんのこと、一般的な ライティングとも、言語形式も談話特徴も異なり、さらに、個別言語それぞれの特徴も反映されるため、母語の転移などを含めて日本語を母語とする英語学習者に特に弱い点を整理し、そこに特化した教育方法を検討し、実施する必要がある。

２．研究の目的

日本語と英語の意見文で、どのような言語形式が用いられるかを明らかにし、用法基盤モデルに基づいて言語分析をする。その結果から、日本語を母語とする英語学習者がアカデミックライティングにおいて日本語のライティングの影響があるかどうか、またどのような弱点があるのか洗い出し、今後のアカデミックライティング指導へ貢献する。本研究の結果は、今後の策略的な英語論文執筆支援のための基礎研究として、言語教育研究に資するものとする。また研究分担者である伊集院郁子の『日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース』 と同様の手法で英語学習者コーパスを構築・公開することで、将来的に日英両言語において当該分野の研究の発展に寄与できる。

３．研究の方法

まず、日本語の意見文において、どのような言語形式が使われているのか、または使われがちなのかを伊集院の『日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース』を基に分析した。同時にそのデータベースと全く同様の手法で日本語を母語とする英語学習者による英語意見文を収集し、言語形式とその談話を比較し、その同異が母語によるものなのかを分析する。また英語母語話者のデータも同様に収集・比較検討し、結果の原因を探るとともに日本の英語教育におけるアカデミックライティング教育指導へ貢献する。

４．研究成果

本研究では 、第 1・第 2 言語としての英語と日本語各データ収集、そのデータのネット公開、またそのデータを利用した言語研究成果という 3 つの実績をあげることができた。

(1)データ・情報収集

データ収集のための倫理審査を経た後、平成 25 年度から 27 年度の 3 年間で、合計 231 人からの意見文データを収集できた。内訳は、120 人の英語母語話者と 79 人の日本語母語話者による英語意見文と 32 人の英語母語話者による日本語意見文である。また、豪国クィーンズランド大学では、アカデミックライティングを担当しているクリティカルシンキングプロジェクト長で本研究の研究協力者である Ellerton, Peter と、Academic English & Thesis Writing for International Students（留学生向けのアカデミック英語と論文の書き方）の授業担当者である Bailey, Penny とインタビュー・ミーティングを実施したり、大学が主催する学生向けのアカデミックライティングワークショップ (http://www.uq.edu.au/student-services/workshops) に 参加して、現地での教育方法・方針について貴重な情報を得ることができた。今や「教育」は豪国の輸出産業において、石炭と鉄に続く第 3 位の産業であり (大竹 2013) 、英語を母国語とする学生だけでなく留学生のアカデミック英語教育にも力を入れていることがわかった。それらの教育は、ライティングのフォーマットだけでなく、談話的な教育も実施されていることがわかった。

(2)データ公開

収集した 231 人（120 人の英語母語話者と 79 人の日本語母語話者による英語意見文と 32 人の英語母語話者による日本語意見文）の意見文データは The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students として インターネット上に無料公開した (http://www.u-sacred-heart.ac.jp/okugiri/links/moecs/moecs.html)。 利用者の利便性を考慮し、共同研究者である伊集院郁子の「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」と連携し、伊集院のデータ 246 ファイルを合わせると合計 477 ファイルを公開中である。これにより、同種のデータを大量に多言語で公開し、英語でデータ公開することにより、世界中の研究者が自由に利用できるようにした。すでに利用者が多数あり、国際的な言語研究に寄与しているといえる。

(3)収集データを使用した研究成果

英語と日本語の意見文の形式的特徴を談話的に分析することにより、様々な言語形式について談話分析を実施した。またその研究成果を国内外で研究発表した。

① 連体修飾節の使用

日本語を母語とする英語学習者による英語関係節構文の習得を談話的特徴の観点から考察し，談話的要素が英語関係節構文の習得において大きく影響していることを明らかにした。分析対象とした談話的特徴の項目は,

関係節構文内の先行詞の有生性（Animate (有生) / Concrete Inanimate (具象無生) / Abstract Inanimate (抽象無生)) (Ming & Chen, 2010) と情報度(New（新情報）/ Identifiable (特定可能情報) / Given (旧情報)) (Du Bois, 1980), そして関係節の機能 (Characterisation（特徴）/ Identification (特定)) (Fox & Thompson, 1990)である。

本研究では話し言葉と書き言葉における学習者とネイティブの英語関係節構文の産出の違いと，学習者の習熟度を初中級・中級・上級に分類し，習熟度レベルによる英語関係節構文の習得の違いも比較した。

調査の結果，先行詞の有生性と情報度，また関係節の機能において学習者とネイティブの間に有意な差がみられた。ネイティブは，関係節に限らない一般的な英語での談話内にみられるように，関係節を使用する際にも斜格名詞句に新情報を使用し，さらに関係節の先行詞とする傾向がみられた。一方学習者においては，特に習熟度の低い学習者は一般的な日本語の談話内でみられるように，目的格名詞に新情報を使用し，英語関係節の先行詞とする傾向が強いことが分かった。

有生性に関しては，ネイティブは英語関係節を使用する際，話し言葉では具象無生，書き言葉では抽象無生の名詞句を修飾する傾向があった。一方学習者は英語関係節使用する際，書き言葉では有生の名詞句を修飾する傾向があることがわかった。さらに習熟度の高い上級学習者は話し言葉でも書き言葉と同様に，有生の名詞句を修飾する傾向がみられた。これは，学習者が特定の人物や特定層の人(々)を他の物と識別するために，関係節構文をコミュニケーションストラテジーの一つとして使用していることが推察される。この現象が上級学習者に強くみられたのは，習熟度の高い学習者は文法的に複雑な関係節構文を思い通りに産出できることが一つの原因と考えられる。

顕著な点はネイティブ，学習者共に，書き言葉において Identification (特定)の機能を伴う関係節が頻繁に産出されることであった。これは一般的な話し言葉では視覚的・直示的情報が存在するのに対し，書き言葉ではそれらが不在であることが一つの原因と考えられる。特に学習者はネイティブよりも話し言葉においても特定の使用が多くみられた。これは，学習者はネイティブよりも概して語彙数が少なく，特定の人（々）を表すために関係節をパターン化して一つの名詞句として使用しているためであると考えられる。

以上の結果から，本研究では第一言語習得だけでなく，第二言語習得においても談話的特徴が関係節構文の産出に大きく影響していることがわかった。本研究の結果から，言語教育の現場においても単なる文法の習得のみでなく，話し言葉と書き言葉による違い，結束性，また談話的特徴の違いについての指導の必要性が明らかとなった。

② 意見文における英語“For example”と日本語「例えば」の使用の比較し、同異を明らかにした。英語意見文での学習者の意見文には、母語話者と異なる“for example”の使用も認められた。これらの特徴が見られた要因として、第二言語で意見文を執筆する際に、言語運用力の限界を補おうとしてディスコースマーカーを多用している可能性や母語である日本語の用法が転移している可能性を示した。この結果は、今後の英語と日本語のアカデミックライティング教育に貢献することができた。

③“I think”の使用とディスコースマーカーとしての機能について英語母語話者と日本語母語話者の異同を明らかにすることができた。その分析結果は英語のアカデミックライティング教育に示唆を与えるものであり、特に日本語母語話者による英語ライティングでの“I think”の多用については他の研究者も指摘していたが、なぜ多用されるのかについて、本研究が初めてその理由を明らかにすることができた。英語意見文では、個人的な経験やはっきりとした証拠はない可能性など、説得力にかける表現として“I think”が使用される場合が多いが、日本語の「と思う」や「と考える」は、意見を明言したり、強調する際に使われていることが明らかとなった。さらに日本語母語話者は英語の意見文においても、日本語の用法を英語に転移しており、この不適切な転移がアカデミックライティングにおいて低い評価に繋がっている可能性を示唆する結果となった。

ただし、“I think”はアカデミックライティングにおいて全く使用してはいけない言語表現というわけではない。本研究の結果から、英語アカデミックライティングにおいて短絡的に“I think”を使わないように指導するのではなく、いつ“I think”を使うのが適切か、または使うと説得力が低くなるのかを明らかにして指導することにより、学習者が意見文の中で効果的に“I think”を使用できるようになることが期待される。

＜引用文献＞

① 大竹美喜、グローバル・キャリア教育産業の創設と育成の必要性」首相官邸教育再生実行会議第八回目会議資料http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai8/siryou3.pdf、2013

②Ming, T. & Chen, L., A discourse-pragmatic study of the word order variation in Chinese relative clauses. Journal of Pragmatics, 42 (1),2010, 168-189

③ Du Bois, J. , Beyond definiteness: The trace of identity in discourse. In W. Chafe (Ed.), The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of

Narrative Production Norwood, NJ: Ablex. 1980.pp. 203-274
④ Fox, B. A. & Thompson, S. A., A discourse explanation of the grammar of relative clauses in English conversation. Language, 66 (2), 1990, 297-316.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）
小森和子・柳澤絵美、日本語プログラムの妥当性検証の試み－日本語能力試験 Can-do 自己評価リストを利用して－、国際日本学研究、査読有、2016、93-118

奥切恵・伊集院郁子・小森和子、日本人英語学習者による意見文の論理展開－言語形式とその機能に着目して－、日本語用論学会第 17 回大会論文集、査読有、2015、243-246

伊集院郁子・ノジュヒョン、日韓の意見文に見られるタイトルと文章構造の特徴－日本語母語話者と韓国語母語話者と韓国人日本語学習者の比較－、社会言語科学、査読有、第 18 巻、2015、147-161

三國純子・小森和子・徐一平、中国語を母語とする日本語学習者の漢語連語の習得－共起後の違いが誤文訂正に及ぼす影響、中国語話者のための日本語教育研究、査読有、2015、34-49

奥切恵、 Information status of English relative constructions by Japanese speakers: A comparison between spoken and written language、日本認知言語学会論文集、査読有、Vol. 14、2014、225-236

奥切恵、 English relative constructions and discourse in spoken and written language、 KLA Journal、査読有、2014、Vol. 1、29-40

奥切恵、 The effect of animacy status on the acquisition of English relative constructions by Japanese learners: A comparison of spoken and written language、JACET-KANTO Journal、査読有、Vol. 1, 2014、20-35

奥切恵、 The animacy status in the production of English relative constructions by Japanese learners in spoken and written discourse、 Proceedings of the 18th Conference of Japanese Studies Association of Australia: Peer-reviewed full papers、査読有、2014、Duck-Yong Lee(編) ISBN: 978-0-9750321-2-1

伊集院 郁子・工藤 嘉名子、日本人大学生の意見文における『譲歩』の論理性、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、第 40 号、査読無、2014、35-51

小森和子、中国語を母語とする日本語学習者の読解能力を予測する日本語の語彙知識：構造方程式モデリング（SEM）による分析、Proceedings of the 18th Conference of Japanese Studies Association of Australia: Peer-reviewed full papers、査読有、2014、Duck-Yong Lee(編) ISBN: 978-0-9750321-2-1

伊集院郁子、アカデミック・ライティング能力の獲得を目指した Can-do リストの策定－初級から超上級レベルまでの学習の接続－、シドニー日本語教育国際研究大会 Conference Program、査読有、2014、67

小森和子、日本語学習者の語彙知識の習得に及ぼす第一言語の影響－中国語を第一言語とする日本語学習者の和語習得を通して－、明治大学国際日本学研究、Vol. 6, No. 1、査読有、2014、91-115

小森和子・玉岡賀津雄・斉藤信浩・宮岡弥生、第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の日本語の漢字語の習得に関する考察、日本語研究、第 5 号、2014、1-16

奥切恵、 The use of English relative constructions by Japanese learners in written language 、 The International Journal of Literacies、Vol. 19, No. 13、査読有、2013、13-24

伊集院郁子、意見文末尾の接続表現に関する一考察 －JLC1 年コース作文データベース」の分析－、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、第 39 号、査読無、2013、93-104

小森和子、漢語と和語の違いに関する中国人日本語教員の認識、明治大学国際日本学研究、Vol. 5, No. 1、査読有、2013、19-38

〔学会発表〕（計 16 件）
奥切恵・ 小森和子・伊集院郁子、The overuse of "I think" by Japanese learners in English academic writing、Pacific Second Language Research Forum 2016、査読有、2016 年 9 月 9-11 日(予定)中央大学

奥切恵、"I think" as a discourse marker by Japanese learners of English、The JACET 55th International Convention、査読有、2016 年 9 月 1-3 日(予定)、北星学園大学

奥切恵・ 小森和子・伊集院郁子、 The

function of "I think" by Japanese learners of English and first language transfer、The 26th European Second Language Association Conference、査読有、2016 年 8 月 24-27 日(予定)、Jyväskylä（Finland）

奥切恵、 What is the Reason for Your Reason? Japanese Learners' Metalinguistic Use of "Reason"、 The 10th Annual Convention of JACET Kanto Chapter、査読有、2016 年 7 月 3 日(予定)、 青山学院大学

奥切恵・伊集院郁子・小森和子、 日本人英語学習者による意見文の論理展開―言語形式とその機能に着目して―、日本語用論学会第 17 回年次大会（ポスター）、査読有、2014 年 11 月 30 日、京都ノートルダム女子大学

奥切恵、 The Use of "I" by Native English Speakers and Japanese English Learners in Academic Writing、2015 年度大学英語教育学会関西支部秋季大会、査読有、2015 年 11 月 28 日、神戸学院大学

奥切恵、Preferred argument structure and the English relative constructions by Japanese learners in spoken language、Applied Linguistics Association of Australia World Congress 201、査読有、2014 年 8 月 14 日、ブリスベン（オーストラリア）

伊集院郁子、アカデミック・ライティング能力の獲得を目指した Can-do リストの策定―初級から超上級レベルまでの学習の接続―、シドニー日本語教育国際研究大会、査読有、2014 年 7 月 12 日、シドニー工科大学（オーストラリア）

奥切恵、 Our roles in foreign language teaching in the context of globalization in Japan、駒場言葉研究会 MAYA Consortium 共催「グローバル化時代の外国語教育学生コロキアム」、招待講演、2013 年 11 月 17 日、東京大学駒場キャンパス

奥切恵、The information status of English relative constructions by Japanese speakers: A comparison between spoken and written languages、日本認知言語学会第 14 回全国大会、査読有、2013 年 9 月 22 日、京都外国語大学

工藤嘉名子・伊集院郁子、意見文における効果的な『譲歩』とそうでない『譲歩』、第 41 回日本教育方法研究会、査読有、2013 年 9 月 21 日、立命館アジア太平洋大学

奥切恵、SLA and discourse analysis: what can discourse properties tell us about the acquisition of English relative clauses by Japanese learners and about teaching?、The JACET 52nd International Convention、査読有、2013 年 9 月 1 日、京都大学

奥切恵、 The animacy status in the production of English relative constructions by Japanese learners in spoken and written discourse、Japanese Studies Association of Australia 2013 Conference、査読有、2013 年 7 月 10 日、キャンベラ（オーストラリア）、査読有、

小森和子、中国語を母語とする日本語学習者の読解能力を予測する日本語の語彙知識―構造方程式モデリング（SEM）による分析―、査読有、2013 年 7 月 10 日、キャンベラ（オーストラリア）

奥切恵、The information status of English relative constructions by Japanese learners in spoken and written language (英語関係節構文の習得とその談話特徴―日本人学習者の話し言葉と書き言葉においての比較―)、第 13 回日本第二言語習得学会年次大会、査読有、2013 年 6 月 1 日、中央大学

奥切恵、Does "discourse" matter in the acquisition of English relative constructions by Japanese learners in the spoken and written language?、駒場言葉研究会第 6 回研究会、招待講演、2013 年 5 月 25 日、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計 6 件）

伊集院郁子、外語教学研究出版社、学習者要因の分析②―コーパスに基づく研究―、『日語教学研究』徐敏民・近藤安月子（編）、2016、担当ページ 385-406

小森和子、外語教学研究出版社、中国語話者の語彙習得とその指導、『日語教学研究』徐敏民・近藤安月子（編）、2016、担当ページ 200-221

姫野伴子・小森和子・柳澤絵美、研究社、『日本語教育学入門』、2015、 240

奥切恵、風間書房、『The acquisition of the discoursal properties of English relative constructions by Japanese learners』、2014、290

奥切恵他、 De Gruyter Mouton, Information status and English relative constructions: A corpus-based study of Japanese learners in spoken language、『Yearbook of the German Cognitive Linguistics Association』, Susanne Flach & Martin Hilpert（編）、2014, 21-37

奥切恵他、MAYA Consortium, The acquisition and the animacy status of English relative constructions and the input by English textbooks in Japan、『グローバル化時代の外国語教育（Changing Roles of Foreign Language Teaching/Learning in the Context of Globalization in Japan)』，トム・ガリー他（編)、2014，81-97

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
多言語コーパス公開
The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students (MOECS)
http://www.u-sacred-heart.ac.jp/okugiri/links/moecs/moecs.html

奥切恵研究室ホームページ
http://www.u-sacred-heart.ac.jp/okugiri/

６．研究組織
(1)研究代表者
奥切　恵（OKUGIRI, Megumi）
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：70410199

(2)研究分担者
伊集院　郁子（IJUIN, Ikuko）
東京外国語大学・国際日本学研究院・准教授
研究者番号： 20436661

小森　和子（KOMORI, Kazuko）
明治大学・国際日本学部・准教授
研究者番号：60463890

(3)連携研究者
岡　秀夫（OKA, Hideo）
目白大学・外国語学部・教授
研究者番号：90091389

三國　純子（MIKUNI, Junko）
文化学園大学・服飾学部・教授
研究者番号：　00301705

(4)研究協力者
Maree, Claire
メルボルン大学・Asia Institute・Senior Lecturer

中根育子（Nakane, Ikuko）
メルボルン大学・Asia Institute・Senior Lecturer

青山友子（Aoyama, Tomoko）
クィーンズランド大学・School of Languages and Cultures・准教授

Ellerton, Peter
クィーンズランド大学・Faculty of Humanities and Social Sciences, Director UQ Critical Thinking project・Lecturer

岩崎しまこ（Iwasaki, Shimako）
モナシュ大学・the Faculty of Arts・Lecturer

吉田真樹（Yoshida, Maki）
モナシュ大学非常勤講師
メルボルン大学大学院博士課程

ロシター　ポール（Rossiter, Paul）
東京大学大学院総合文化研究科・名誉教授

ガリー　トム（Gally, Tom）
東京大学大学院総合文化研究科・教養学部・教授・グローバルコミュニケーション研究センター長

石川慎一郎(Ishikawa, Shin’ichiro)
神戸大学・教育推進機構国際コミュニケーションセンター・教授